

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号： 1 3 2 0 1
研究種目： 奨励研究
研究期間： 2021 ~ 2021
課題番号： 2 1 H 0 3 8 6 6
研究課題名 『承久記絵巻』の基礎的研究

研究代表者

長村 祥知 (NAGAMURA, Yoshitomo)

富山大学・学術研究部人文科学系・講師

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 470,000 円

研究成果の概要： 当初の研究計画の通り、従来は詳細が不明であった龍光院本『承久記絵巻』全6巻の基礎的研究を進めた。同絵巻は、所在が明らかなものでは承久の乱（1221年）の全体を描く唯一の作品である。その書誌を紹介するとともに、近世の文献上に所見する 承久の乱を描く絵 との関連や、本文の特色を解明した学術論文を公表した。

その他、承久の乱を主題とする唯一の単著研究書である長村祥知『中世公武関係と承久の乱』（吉川弘文館、2015年）刊行後の、学界・地方公共団体・博物館・一般読書界・テレビ等における承久の乱をめぐる研究状況・出版・催事・番組等の動向を整理した時評を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2021年は承久の乱（1221年）から800年の年であった。ゆかりの各地で催事が営まれ、2022年に放映される鎌倉幕府2代執権北条義時を主人公とするテレビドラマでは承久の乱が終盤の見せ場になることが予告されるなど、社会的・国民的な関心を集めている。

この承久の乱の全体を描く龍光院本『承久記絵巻』全6巻について、従来は詳細が不明だったが、本研究で基礎的な事柄を解明した。本研究の成果は、研究者人口が少ない『承久記』の本文研究はもとより、近年関心が高まっている「四部之合戦書」（『保元物語』『平治物語』『平家物語』『承久記』）に発する絵巻との関連など、多くの発展的課題に資すると予想される。

研究分野： 日本史・日本文学

キーワード： 『承久記絵巻』 『承久記』 『吾妻鏡』 絵巻 軍記物語 承久の乱

1. 研究の目的

承久3年(1221)、日本史上初めて、後鳥羽院が、皇統を背後に持たない東国武士勢力に合戦で敗北し、彼を含む三人の上皇が配流されることとなった。本研究は、この承久の乱を描く軍記物語『承久記』の絵巻である龍光院本『承久記絵巻』全6巻についての基礎的研究を進めることを目的とする。

承久の乱あるいは『承久記』に取材した絵巻・絵本の存在はほとんど知られておらず、まとめて絵画化され、今日所在の明らかな作品は龍光院本のみである。『承久記』研究はもとより、軍記物語の絵画化という文脈からも、きわめて重要な作例と位置づけられる。

龍光院本『承久記絵巻』は、1939年に恩賜京都博物館(現、京都国立博物館)で開催された「後鳥羽天皇七百年記念拝展」に出品され、当時は龍光院(和歌山県)所蔵だったことが知られる。その後、遅くとも1974年以前には所在不明となっていたが(松林靖明「解説」『新撰日本古典文庫 承久記』現代思潮社、1974年)、近年、当該資料を個人が所有していることが判明し、所有者から調査と成果公表をご快諾頂いた。

一年という期間での達成を目指す具体的課題として、『承久記絵巻』詞書と『承久記』流布本・『吾妻鏡』『承久軍物語』との対比・影響関係の解明に取り組む。

2. 研究成果

当初、本研究課題は、非「研究機関」聖護院史料研究所の客員研究員として行う予定であったが、申請者が6月1日より「研究機関」富山大学学術研究部人文科学系講師に着任したことにより、富山大学で研究費を管理することとなった。

まず、本研究課題の中心対象である『承久記絵巻』全6巻に関して、2021年度のうちに展示公開や所有者の変更があったので、その事実を記しておく。

申請者の別の所属先(2021年5月31日まで在職)である京都府京都文化博物館で2021年4月6日～4月24日に開催(当初は5月23日までの予定であったが、政府の緊急事態宣言を受けた京都府庁の要請により、4月25日以降は休館)の特別展「よみがえる承久の乱 後鳥羽上皇vs鎌倉北条氏」で、『承久記絵巻』全6巻が展示公開された。

2021年6月下旬、所有者個人から龍光院(和歌山県)に『承久記絵巻』全6巻が寄贈され、9月より高野山霊宝館に寄託された。龍光院は1939年の時点で『承久記絵巻』を所有していたことが知られ、約80年ぶりに本来の所有者のもとに戻ったことになる。

如上の『承久記絵巻』に関して、長村祥知「『承久記絵巻』の基礎的研究」(『国語と国文学』98-11、2021年11月)を公表し、同絵巻の書誌を紹介するとともに、近世の文献上に所見する承久の乱を描く絵との関連や本文の特色を考察した。

承久の乱を描く絵が龍光院本に限らず存したことは、近世の文献上で確認できるが、その数は多くない。江戸時代には『承久軍之絵』三巻が知られており、昭和時代には『承久記』の奈良絵本と思しき古典籍の詞書が紹介されたが、いずれも現在は所在不明である。また龍光院本とは別の(1997年時点で松本寧至氏所蔵)白描『承久記絵巻』零本が実在する。これら数少ない承久の乱あるいは『承久記』を描いた絵は、いずれも龍光院本の底本・写本とは考えがたく、近世において龍光院本全6巻はよく知られた作品ではなかったと考えられる。

龍光院本の詞書は、すでに紹介されている『承久記』本文では流布本系の慶長古活字本・寛永版本に最も近い。従来知られている流布本系の本文がいずれも漢字片仮名交じりであることに対して、龍光院本は漢字平仮名交じりであり、平仮名の分量が多い点。また、数文字程度の異文も複数あり、古活字本・版本の誤りを正した文や、解釈・事実認識が変わる文もある。

こうした龍光院本の本文改変は必ずしも修正ばかりではなく、依拠した文献に基づく誤りもみられる。例えば後鳥羽院が発した北条義時追討院宣の使者を、慶長古活字本・版本は「押松」とし、『吾妻鏡』写本にも「押松丸」と見える。『承久軍物語』はこの人物を「なれ松」としており、それは版本『吾妻鏡』の付訓「狎松丸(ナレマツマル)」に基づくことが、古く1918年に龍肅によって解明されている。この人物を、龍光院本も「なれ松」とするのである。龍光院本は慶長古活字本系統の本文を基本としつつ、版本『吾妻鏡』をも参照したと考えられる。

以上のごとく、龍光院本の詞書は、慶長古活字本・版本の漢字仮名交じり文をもとに、多くを平仮名に改めたものであり、さらに版本『吾妻鏡』をも参照している。その過程で微細な異文が複数生じていることを解明した。

『承久軍物語』との対比にも着手し、既述の通り『承久記絵巻』と共通する特色が見出せた。

『承久軍物語』もまた絵巻・絵本の原本と考えられており、両者の関係についてなお考察を深めるべき段階にある。

また、2021年には、800年前の承久3年(1221)に起こった承久の乱に関して、各地で様々な行事が開催された。そのことを整理した長村祥知「時評 承久の乱から800年」(『隠岐の文化財』39、2022年3月)を公表した。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 長村祥知	4. 巻 98-11
2. 論文標題 『承久記絵巻』の基礎的研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 122-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長村祥知	4. 巻 39
2. 論文標題 時評 承久の乱から800年	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 隠岐の文化財	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

〔図書〕 計4件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------